

章・節	現行（平成 19 年 3 月策定）	改訂理由	改訂素案（平成 25 年 3 月：予定）
	表示凡例 改訂した箇所：_____ 削除した箇所：_____（見え消し）		表示凡例 改訂文：_____ 挿入文：_____

第1章 都市の概況

1. 位置・沿革等

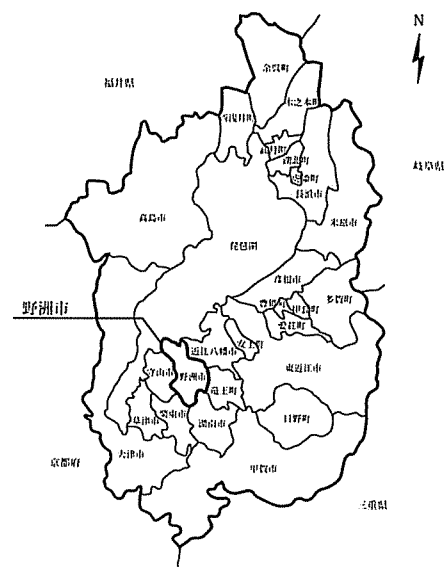
(1) 位置・地勢

野洲市は、平成16（2004）年10月に野洲郡の野洲町と中主町とが合併して新たに誕生した都市です。滋賀県の南部、湖南地域に位置し、西は守山市・栗東市、南は湖南市、東は近江八幡市、竜王町にそれぞれ接し、日本最大の湖である琵琶湖に面しています。東西9.5km、南北13.9kmに広がり、面積は琵琶湖を除き61.45km²です。

本市は、直線距離で大阪市へ約65km、京都市へ約25km、大津市へ約17kmの距離にあり、これらの都市とはJR東海道線（琵琶湖線、京都線）で結ばれています。

本市は、気候の漸移地帯に位置しており、複雑で変化に富んだ気候で、北陸と瀬戸内気候の特色が共存した気候が特徴となっています。比較的温暖で雨量の少ない地域ですが、琵琶湖面と陸地の温度差によって発生する湖陸風が琵琶湖周辺地域の風を特徴づけています。

本市の地形は、東南部の三上山を中心とする山地と、山地から琵琶湖に向かって緩やかに広がる平坦地に大きく分けられます。通称「近江富士」と呼ばれ地域のランドマークとなっている三上山や菩提寺山、妙光寺山、鏡山等によって山地を形成しています。この山地部には、滋賀県希望が丘文化公園、県立近江富士花緑公園、家棟川の水源地である辻ダムや山上ダムなどが立地し、自然環境を身近に感じられる地域となっています。平坦地は、野洲川、日野川等の堆積作用によって形成された沖積平野で、野洲川右岸の扇状地と平坦な三角州に大別されます。扇状地には市街地が形成され、三角州の大半は農地（水田）として利用されています。



●時点修正

●市町村合併の進展を反映
※図改訂
(平成 24 年 10 月現在、滋賀県ホームページより)

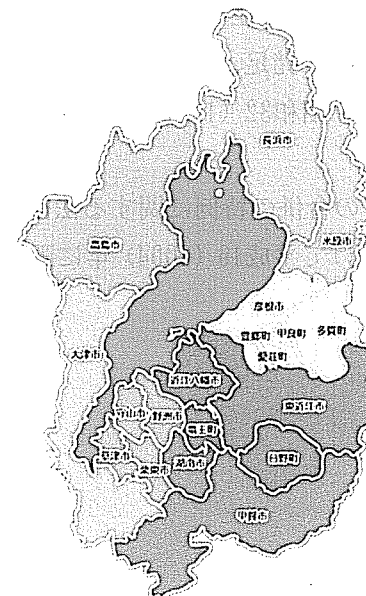
(1) 位置・地勢

野洲市は、平成16（2004）年10月に野洲郡の野洲町と中主町とが合併して新たに誕生した都市です。滋賀県の南部、湖南地域に位置し、西は守山市・栗東市、南は湖南市、東は近江八幡市・竜王町にそれぞれ接し、日本最大の湖である琵琶湖に面しています。東西10.9km、南北18.3kmに広がり、面積は琵琶湖を含み80.15km²です。

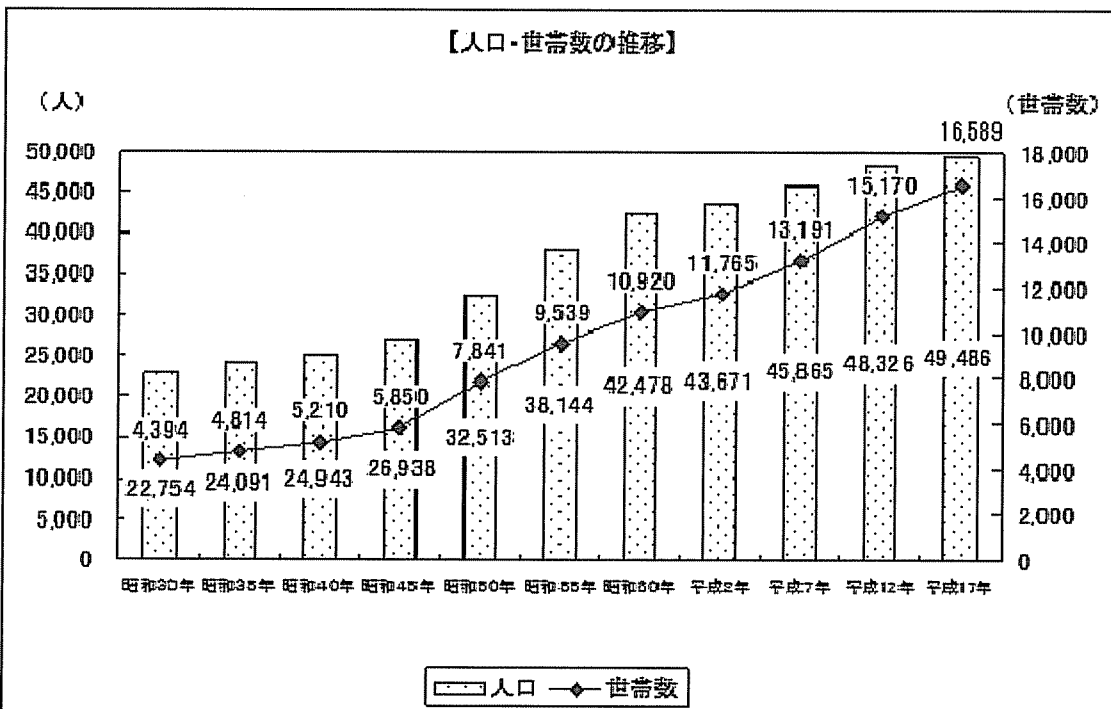
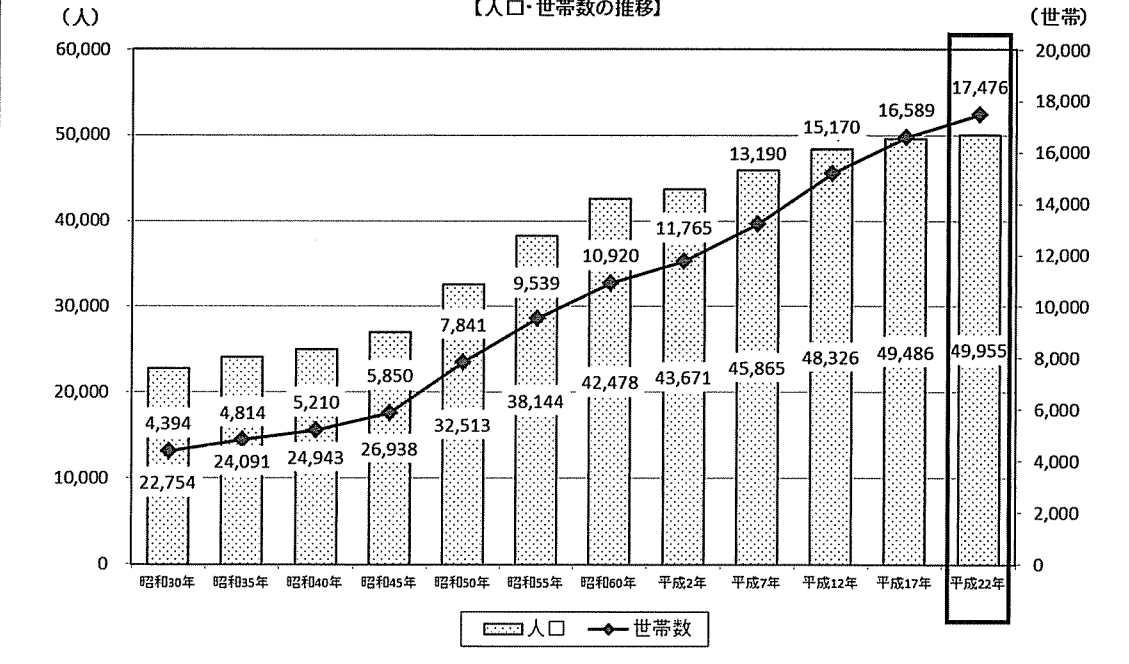
本市は、直線距離で大阪市へ約65km、京都市へ約25km、大津市へ約17kmの距離にあり、これらの都市とはJR東海道線（琵琶湖線、京都線）で結ばれています。

本市は、複雑で変化に富んだ気候で、北陸と瀬戸内気候の特色が共存した気候が特徴となっています。比較的温暖で雨量の少ない地域ですが、琵琶湖面と陸地の温度差によって発生する湖陸風が琵琶湖周辺地域の風を特徴づけています。

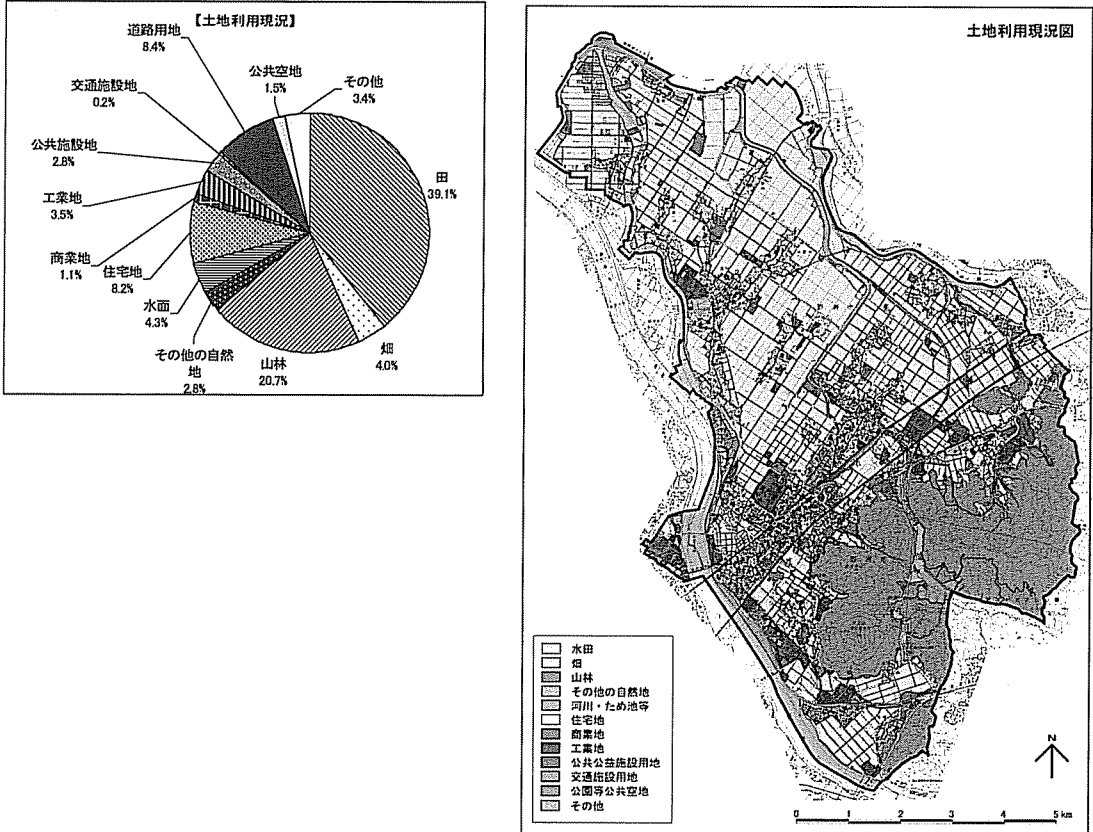
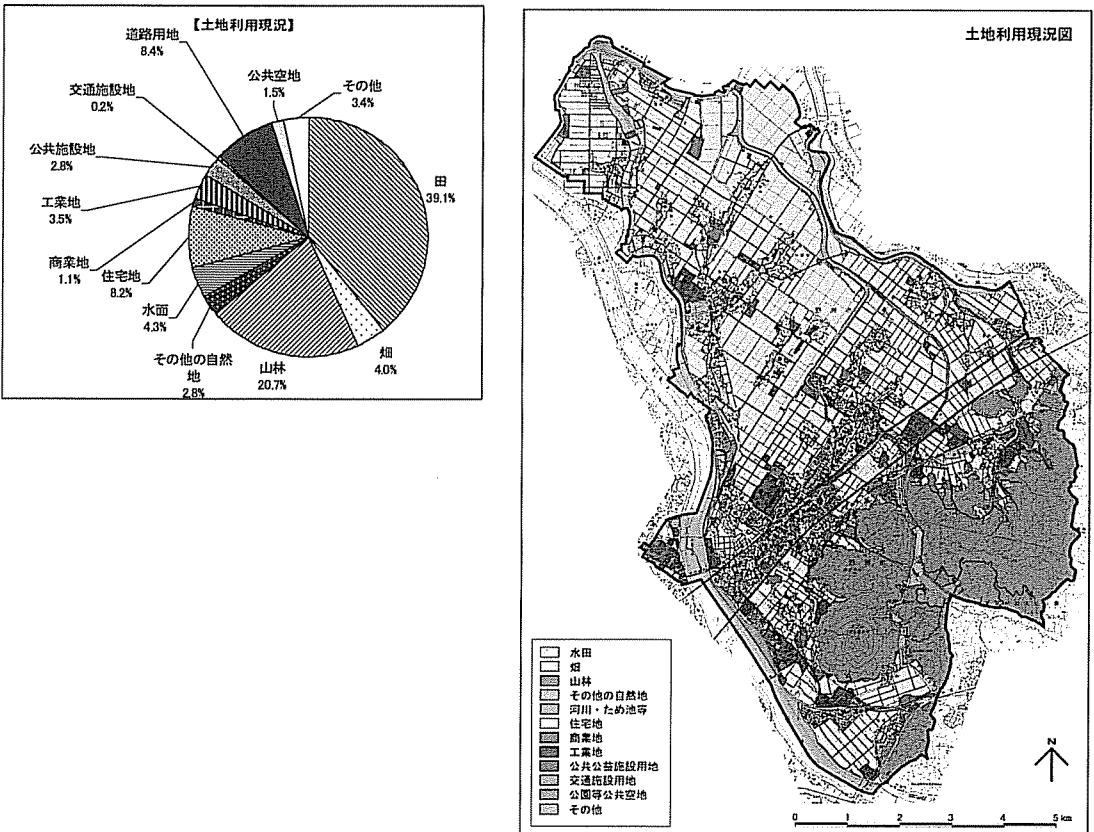
本市の地形は、東南部の三上山を中心とする山地と、山地から琵琶湖に向かって緩やかに広がる平坦地に大きく分けられます。通称「近江富士」と呼ばれ地域のランドマークとなっている三上山や菩提寺山、妙光寺山、鏡山等によって山地を形成しています。この山地部には、滋賀県希望が丘文化公園、県立近江富士花緑公園、家棟川の水源地である辻ダムや山上ダムなどが立地し、自然環境を身近に感じられる地域となっています。平坦地は、野洲川、日野川等の堆積作用によって形成された沖積平野で、野洲川右岸の扇状地と平坦な三角州に大別されます。扇状地には市街地が形成され、三角州の大半は農地（水田）として利用されています。


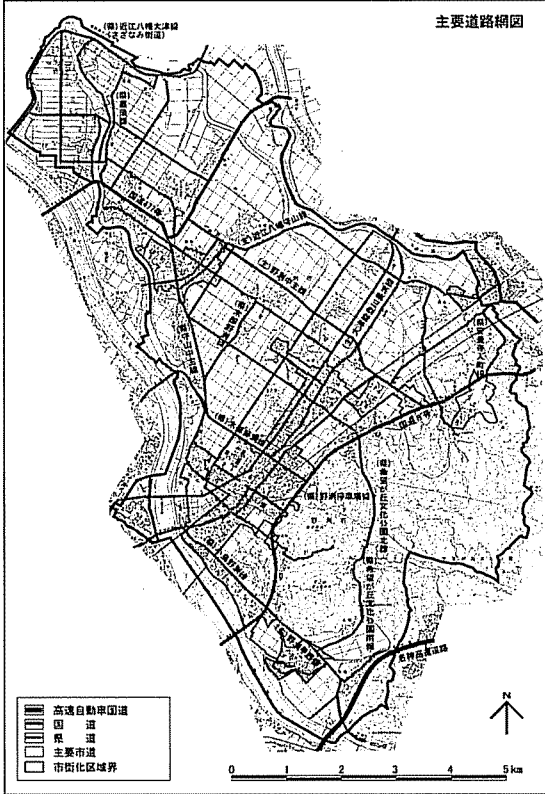


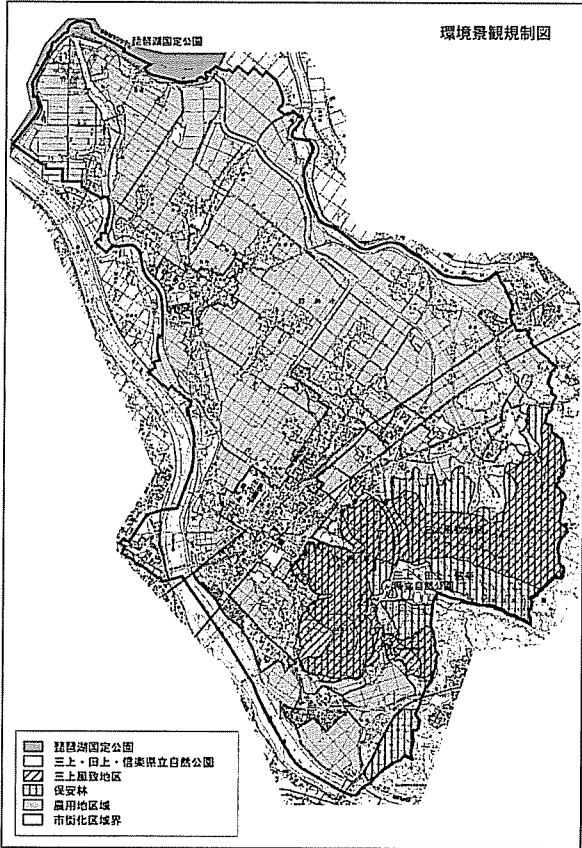
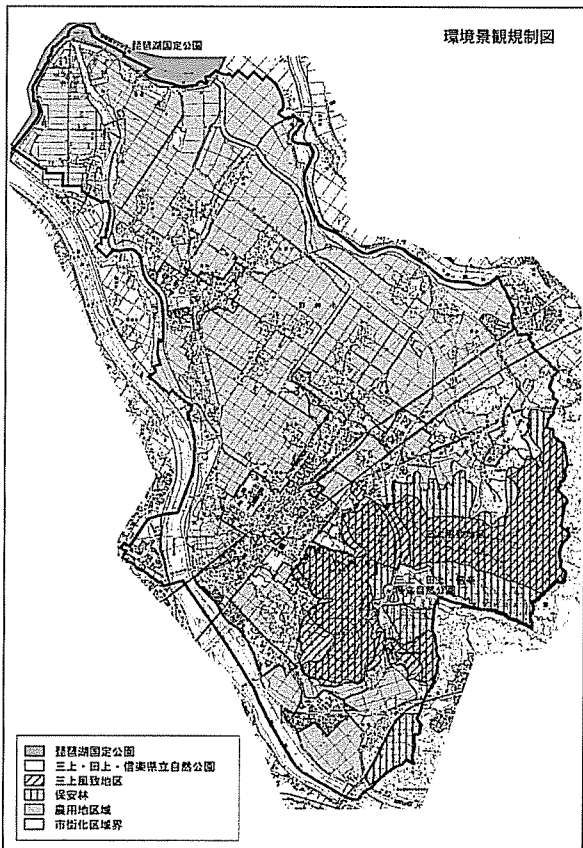
章・節	現行（平成19年3月策定）	改訂理由	改訂素案（平成25年3月：予定）
	表示凡例 改訂した箇所：_____ 削除した箇所：_____（見え消し）		表示凡例 改訂文：_____ 挿入文：_____
	<p>(2) 沿革</p> <p>野洲市域を含む滋賀県は、古くから近江国と呼ばれ、滋賀郡、栗太郡、甲賀郡、野洲郡、蒲生郡等12郡93郷があったとされます。このうち野洲郡は、現在の野洲市と守山市、近江八幡市の一部に該当し、郡衙（役所）は現在の野洲市役所周辺にあったと推定されています。</p> <p>中世の近江国は、守護である佐々木氏（六角氏）の勢力下にありましたが、市域では現在の祇王小学校周辺に佐々木氏の家臣である永原氏が居城し、勢力をもっていました。豊臣秀吉の天下統一以降、全国で検地が行われ、野洲郡における村の規模、境界が確定し、野洲村、市三宅村、三上村、吉地村、乙窪村、比留田村、西河原村など、現在の集落（大字）につながる村の領域が成立しています。</p> <p>近世以降は一円領主が存在しなかったこと等から、野洲郡には拠点となる城下は形成されませんでした。なお、元禄11（1698）年に東氏遠藤家が滋賀郡、野洲郡、栗太郡、甲賀郡のうち一万石の領地を与えられ、三上村に三上藩の陣屋が造られました。</p> <p>明治4（1871）年、廃藩置県によって湖南六郡は大津県となり、翌年の明治5（1872）年には滋賀県と改称し、犬上県を統合して現在の滋賀県が生まれました。そして、明治22（1889）年4月1日の町村制施行により、野洲郡には、現在の野洲市に含まれる7村〔野洲、三上、篠原、義王（祇王）、中里、兵主、中洲〕と他の6村〔守山村等〕が成立しました。その後、明治44（1911）年に野洲村が町制施行し野洲町となり、昭和17（1942）年には野洲町と三上村が合併（野洲町）しました。</p> <p>昭和28（1953）年の町村合併促進法の施行により、昭和30年代前半に全国的に市町村の合併が進められました。野洲郡では、昭和30（1955）年、守山町、小津村、玉津村、河西村、速野村が合併し、新生守山町が発足し、北里村は近江八幡市に編入しました。野洲市域では、中里村と兵主村が合併、町制施行して中主町が発足、同時に野洲町、篠原村、祇王村が合併して新たに野洲町が発足しました。その後、昭和32（1957）年に中洲村の吉川・喜合・菖蒲が中主町と合併しました。</p> <p>平成12（2000）年の合併特例法（市町村の合併の特例に関する法律）の改正を契機として全国的に市町村合併が進み、この流れを受けて平成16（2004）年に野洲町と中主町が合併して現在の野洲市が誕生しました。</p>		<p>(2) 沿革</p> <p>野洲市域を含む滋賀県は、古くから近江国と呼ばれ、滋賀郡、栗太郡、甲賀郡、野洲郡、蒲生郡等12郡93郷があったとされます。このうち野洲郡は、現在の野洲市と守山市、近江八幡市の一部に該当し、郡衙（役所）は現在の野洲市役所周辺にあったと推定されています。</p> <p>中世の近江国は、守護である佐々木氏（六角氏）の勢力下にありましたが、市域では現在の祇王小学校周辺に佐々木氏の家臣である永原氏が居城し、勢力をもっていました。豊臣秀吉の天下統一以降、全国で検地が行われ、野洲郡における村の規模、境界が確定し、野洲村、市三宅村、三上村、吉地村、乙窪村、比留田村、西河原村など、現在の集落（大字）につながる村の領域が成立しています。</p> <p>近世以降は一円領主が存在しなかったこと等から、野洲郡には拠点となる城下は形成されませんでした。なお、元禄11（1698）年に東氏遠藤家が滋賀郡、野洲郡、栗太郡、甲賀郡のうち一万石の領地を与えられ、三上村に三上藩の陣屋が造られました。</p> <p>明治4（1871）年、廃藩置県によって湖南六郡は大津県となり、翌年の明治5（1872）年には滋賀県と改称し、犬上県を統合して現在の滋賀県が生まれました。そして、明治22（1889）年4月1日の町村制施行により、野洲郡には、現在の野洲市に含まれる7村〔野洲、三上、篠原、義王（祇王）、中里、兵主、中洲〕と他の6村〔守山村等〕が成立しました。その後、明治44（1911）年に野洲村が町制施行し野洲町となり、昭和17（1942）年には野洲町と三上村が合併（野洲町）しました。</p> <p>昭和28（1953）年の町村合併促進法の施行により、昭和30年代前半に全国的に市町村の合併が進められました。野洲郡では、昭和30（1955）年、守山町、小津村、玉津村、河西村、速野村が合併し、新生守山町が発足し、北里村は近江八幡市に編入しました。野洲市域では、中里村と兵主村が合併、町制施行して中主町が発足、同時に野洲町、篠原村、祇王村が合併して新たに野洲町が発足しました。その後、昭和32（1957）年に中洲村の吉川・喜合・菖蒲が中主町と合併しました。</p> <p>平成12（2000）年の合併特例法（市町村の合併の特例に関する法律）の改正を契機として全国的に市町村合併が進み、この流れを受けて平成16（2004）年に野洲町と中主町が合併して現在の野洲市が誕生しました。</p>

章・節	現行（平成19年3月策定）	改訂理由	改訂素案（平成25年3月：予定）																																																																														
	表示凡例 改訂した箇所：_____ 削除した箇所：_____（見え消し）		表示凡例 改訂文：_____ 挿入文：_____																																																																														
2.人口と産業	<p>(1)人口</p> <p>野洲市の人口は49,486人で、16,589世帯（平成17年国勢調査）です。人口及び世帯数は、住宅地の開発が進められた昭和40年代後半から50年代にかけて急激に増加し、近年においても緩やかに増加傾向は続いています。鉄道の利便性の向上等により、大阪・京都・大津市等への通勤通学圏としての位置づけが強まったことが影響していると考えられます。また、世帯数の伸び率は人口の伸び率を上回り、1世帯当たりの人口は国勢調査では2.98人と、3人を下回っています。</p> <p>年齢構成は、昭和60（1985）年まではほとんど変化していませんでしたが、近年の年齢階層別人口の推移では、年少人口（0～14歳）が減少（比率が25.0%から15.7%に）し、逆に老年人口（65歳以上）が大幅に増加（比率が9.2%から14.4%に）するという傾向が見られ、全国的な傾向である少子高齢化の進行が本市においても明らかに見られます。ただし、平成12（2000）年の年齢階級別人口比率を県平均値と比較すると、本市は生産年齢人口（15～64歳）の比率が高いという特徴があり、高齢化の進行は比較的遅いと言えます。</p> <p>本市は、主要企業の立地により守山市、近江八幡市、草津市等の近隣市町からの就業者が多い状況です。栗東市、草津市などに対しては流出が多くなっています。また、京都市へは2,000人以上が流出していますが、近年では、近隣市との結びつきが強まっています。</p>	●時点修正	<p>(1)人口</p> <p>野洲市の人口は49,955人で、17,476世帯（平成22年国勢調査）です。人口及び世帯数は、住宅地の開発が進められた昭和40年代後半から50年代にかけて急激に増加し、近年においても緩やかに増加傾向は続いています。鉄道の利便性の向上等により、大阪・京都・大津市等への通勤通学圏としての位置づけが強まったことが影響していると考えられます。また、世帯数の伸び率は人口の伸び率を上回り、1世帯当たりの人口は国勢調査では2.86人と、3人を下回っています。</p> <p>年齢構成は、昭和60（1985）年まではほとんど変化していませんでしたが、近年の年齢階層別人口の推移では、年少人口（0～14歳）が減少（比率が25.0%から15.3%に）し、逆に老年人口（65歳以上）が大幅に増加（比率が9.2%から20.1%に）するという傾向が見られ、全国的な傾向である少子高齢化の進行が本市においても明らかに見られます。この少子高齢化の状況は、平成22（2010）年の年齢階級別人口比率で見ると、県平均とほぼ同様の比率となっています。</p> <p>本市は、主要企業の立地により守山市、近江八幡市、草津市等の近隣市町からの就業者が多い状況です。栗東市、草津市などに対しては流出が多くなっています。また、京都市へは2,000人以上が流出していますが、近年では、近隣市との結びつきが強まっています。</p>																																																																														
	<p>グラフ改訂(平成22年追加)</p>  <table border="1"> <caption>【人口・世帯数の推移】</caption> <thead> <tr> <th>年</th> <th>人口</th> <th>世帯数</th> </tr> </thead> <tbody> <tr><td>昭和30年</td><td>22,754</td><td>4,394</td></tr> <tr><td>昭和35年</td><td>24,091</td><td>4,814</td></tr> <tr><td>昭和40年</td><td>24,943</td><td>5,210</td></tr> <tr><td>昭和45年</td><td>26,938</td><td>5,850</td></tr> <tr><td>昭和50年</td><td>32,513</td><td>7,841</td></tr> <tr><td>昭和55年</td><td>38,144</td><td>9,539</td></tr> <tr><td>昭和60年</td><td>42,478</td><td>10,920</td></tr> <tr><td>平成2年</td><td>43,671</td><td>11,765</td></tr> <tr><td>平成7年</td><td>45,865</td><td>13,191</td></tr> <tr><td>平成12年</td><td>48,326</td><td>15,170</td></tr> <tr><td>平成17年</td><td>49,486</td><td>16,589</td></tr> <tr><td>平成22年</td><td>49,955</td><td>17,476</td></tr> </tbody> </table>	年	人口	世帯数	昭和30年	22,754	4,394	昭和35年	24,091	4,814	昭和40年	24,943	5,210	昭和45年	26,938	5,850	昭和50年	32,513	7,841	昭和55年	38,144	9,539	昭和60年	42,478	10,920	平成2年	43,671	11,765	平成7年	45,865	13,191	平成12年	48,326	15,170	平成17年	49,486	16,589	平成22年	49,955	17,476	<p>グラフ改訂(平成22年追加)</p>	 <table border="1"> <caption>【人口・世帯数の推移】</caption> <thead> <tr> <th>年</th> <th>人口</th> <th>世帯数</th> </tr> </thead> <tbody> <tr><td>昭和30年</td><td>22,754</td><td>4,394</td></tr> <tr><td>昭和35年</td><td>24,091</td><td>4,814</td></tr> <tr><td>昭和40年</td><td>24,943</td><td>5,210</td></tr> <tr><td>昭和45年</td><td>26,938</td><td>5,850</td></tr> <tr><td>昭和50年</td><td>32,513</td><td>7,841</td></tr> <tr><td>昭和55年</td><td>38,144</td><td>9,539</td></tr> <tr><td>昭和60年</td><td>42,478</td><td>10,920</td></tr> <tr><td>平成2年</td><td>43,671</td><td>11,765</td></tr> <tr><td>平成7年</td><td>45,865</td><td>13,190</td></tr> <tr><td>平成12年</td><td>48,326</td><td>15,170</td></tr> <tr><td>平成17年</td><td>49,486</td><td>16,589</td></tr> <tr><td>平成22年</td><td>49,955</td><td>17,476</td></tr> </tbody> </table> <p>資料：総務省「国勢調査」</p>	年	人口	世帯数	昭和30年	22,754	4,394	昭和35年	24,091	4,814	昭和40年	24,943	5,210	昭和45年	26,938	5,850	昭和50年	32,513	7,841	昭和55年	38,144	9,539	昭和60年	42,478	10,920	平成2年	43,671	11,765	平成7年	45,865	13,190	平成12年	48,326	15,170	平成17年	49,486	16,589	平成22年	49,955	17,476
年	人口	世帯数																																																																															
昭和30年	22,754	4,394																																																																															
昭和35年	24,091	4,814																																																																															
昭和40年	24,943	5,210																																																																															
昭和45年	26,938	5,850																																																																															
昭和50年	32,513	7,841																																																																															
昭和55年	38,144	9,539																																																																															
昭和60年	42,478	10,920																																																																															
平成2年	43,671	11,765																																																																															
平成7年	45,865	13,191																																																																															
平成12年	48,326	15,170																																																																															
平成17年	49,486	16,589																																																																															
平成22年	49,955	17,476																																																																															
年	人口	世帯数																																																																															
昭和30年	22,754	4,394																																																																															
昭和35年	24,091	4,814																																																																															
昭和40年	24,943	5,210																																																																															
昭和45年	26,938	5,850																																																																															
昭和50年	32,513	7,841																																																																															
昭和55年	38,144	9,539																																																																															
昭和60年	42,478	10,920																																																																															
平成2年	43,671	11,765																																																																															
平成7年	45,865	13,190																																																																															
平成12年	48,326	15,170																																																																															
平成17年	49,486	16,589																																																																															
平成22年	49,955	17,476																																																																															

章・節	現行（平成19年3月策定）	改訂理由	改訂素案（平成25年3月：予定）
	表示凡例 改訂した箇所：_____ 削除した箇所：_____（見え消し）		表示凡例 改訂文：_____ 挿入文：_____
	<p>(2) 産業</p> <p>野洲市域は、「近江米」の産地として古くから“豊積の里”と呼ばれ、稲作を中心とする農業を基幹産業としてきました。農業は、水稻を中心に小麦や大豆、きゅうり・だいこん等の野菜、メロン、ブドウ、春菊等の施設園芸のように、大都市近郊の特徴ある農業が行われています。昭和40年代以降は場整備が進められ、大半の農地が整備済みとなっている一方、農業従事者の高齢化や後継者不足等が深刻化するなど農業を取り巻く状況は厳しく、農家戸数、耕地面積も減少傾向が続いています。また、近年では、体験農園や農産物加工・販売所等の交流施設が整備されるなど、観光施設と連携した新たな展開が進められています。</p> <p>市域の工業は、昭和30年代後半以降より、大都市近郊の立地特性や交通利便性、さらに積極的な企業誘致により、外国資本の企業をはじめとして、金属、化学工業、一般機械器具、電気機械器具等の多くの企業が立地し、近年では、情報通信機械、電子・デバイス等が中核となっています。本市には滋賀県認定産業団地である野洲工業団地、乙窪工業団地があり、平成9(1997)年に完成しています。また、本市は工場立地促進などを目的とした「野洲市工業振興条例」を制定し、一定の条件を満たした工場立地に対し、用地取得助成、雇用促進助成、環境関連事業助成などの優遇策を行っています。</p> <p>市域では、古くは旧中山道、旧朝鮮人街道沿いに商店が分布しており、特に永原地区では、中世以来「永原市」が開かれるなど、市域の商業の中心となっていました。<u>平成11(1999)年に相次いで2件の大規模店が出店したことから、旧野洲町においては、地元購買率、地元商店充実度は高い増加率を示しています。また、地元購買率と周辺地区からの流入指数から見た消費者の流れとして、旧中主町から守山市への流出傾向が強く、顧客吸引力も市外への流出傾向を示しています。</u></p> <p>本市の観光は、琵琶湖岸のマイアミ浜、あやめ浜や、三上山などの自然資源、兵主神社や御上神社に代表される歴史・文化資源、ちゅうずドリームファームのような体験型施設などがあり、<u>年間の観光客数は180万人前後で推移しています。潜在的な観光地としての可能性はあるものの、観光客のほとんどが日帰り客であり、宿泊客の比率は低くなっています。県の観光入込客統計調査では、「滋賀県希望が丘文化公園」、「びわ湖鮎家の郷」が上位にあります。</u></p>	<p>●改訂総計に即し現状を整理しました</p> <p>●観光客数関連データを統計書より更新 ※観光客数—統計書(出典は県の観光入込客統計調査)で確認済</p>	<p>(2) 産業</p> <p>野洲市域は、「近江米」の産地として古くから“豊積の里”と呼ばれ、稲作を中心とする農業を基幹産業としてきました。農業は、水稻を中心に小麦や大豆、きゅうり・だいこん等の野菜、メロン、ブドウ、春菊等の施設園芸のように、大都市近郊の特徴ある農業が行われています。昭和40年代以降は場整備が進められ、大半の農地が整備済みとなっている一方、農業従事者の高齢化や後継者不足等が深刻化するなど農業を取り巻く状況は厳しく、農家戸数、耕地面積も減少傾向が続いています。また、近年では、体験農園や農産物加工・販売所等の交流施設が整備されるなど、観光施設と連携した新たな展開が進められています。</p> <p>市域の工業は、昭和30年代後半以降より、大都市近郊の立地特性や交通利便性、さらに積極的な企業誘致により、外国資本の企業をはじめとして、金属、化学工業、一般機械器具、電気機械器具等の多くの企業が立地し、近年では、情報通信機械、電子・デバイス等が中核となっています。本市には滋賀県認定産業団地である野洲工業団地（<u>大篠原地先</u>）、乙窪工業団地があり、平成9(1997)年に完成しています。また、本市は工場立地促進などを目的とした「野洲市工業振興条例」を制定し、一定の条件を満たした工場立地に対し、用地取得助成、雇用促進助成、環境関連事業助成などの優遇策を行っています。</p> <p>市域では、古くは旧中山道、旧朝鮮人街道沿いに商店が分布しており、特に永原地区では、中世以来「永原市」が開かれるなど、市域の商業の中心となっていました。<u>現在では、大規模な商業施設の立地などが進み利便性が向上していますが、一方では地域の生活を支える商店の必要性も再認識されています。</u></p> <p>本市の観光資源には、琵琶湖岸のマイアミ浜、あやめ浜や、三上山などの自然資源、兵主神社や御上神社に代表される歴史・文化資源、ちゅうずドリームファームのような体験型施設などがあります。しかし、年間の観光客数は<u>近年減少傾向にあり、平成22年では約130万人となっています。また、観光客のほとんどが日帰り客であり、宿泊客の比率は低くなっています。県の観光入込客統計調査では、「滋賀県希望が丘文化公園」、「びわ湖鮎家の郷」が上位にあります。</u></p>

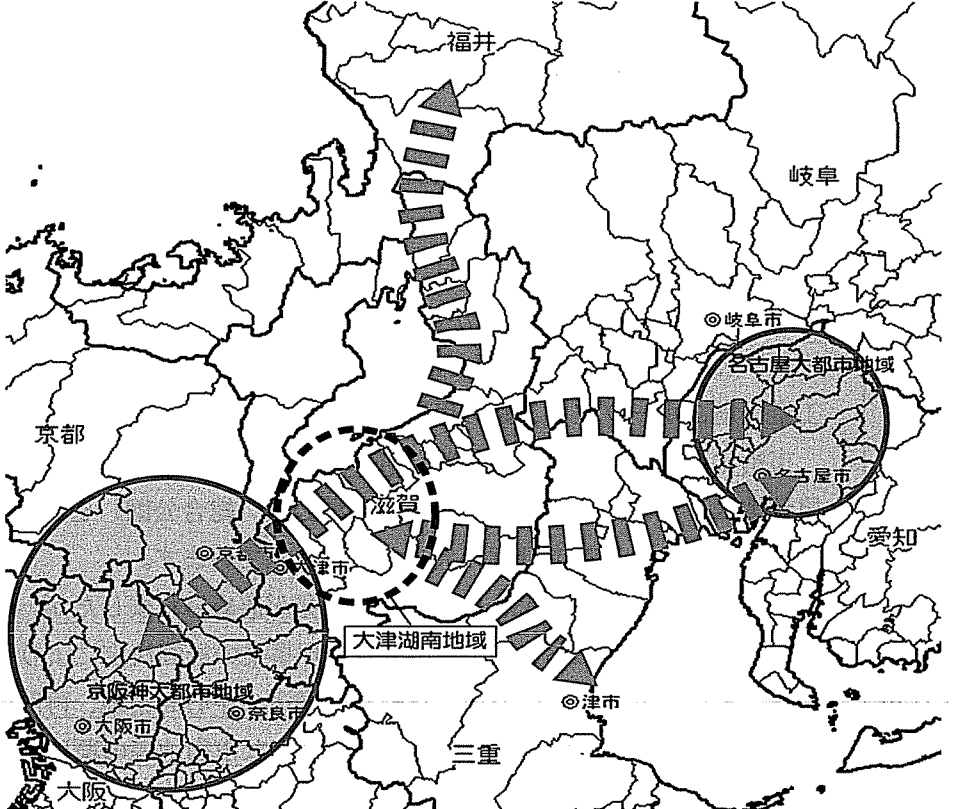
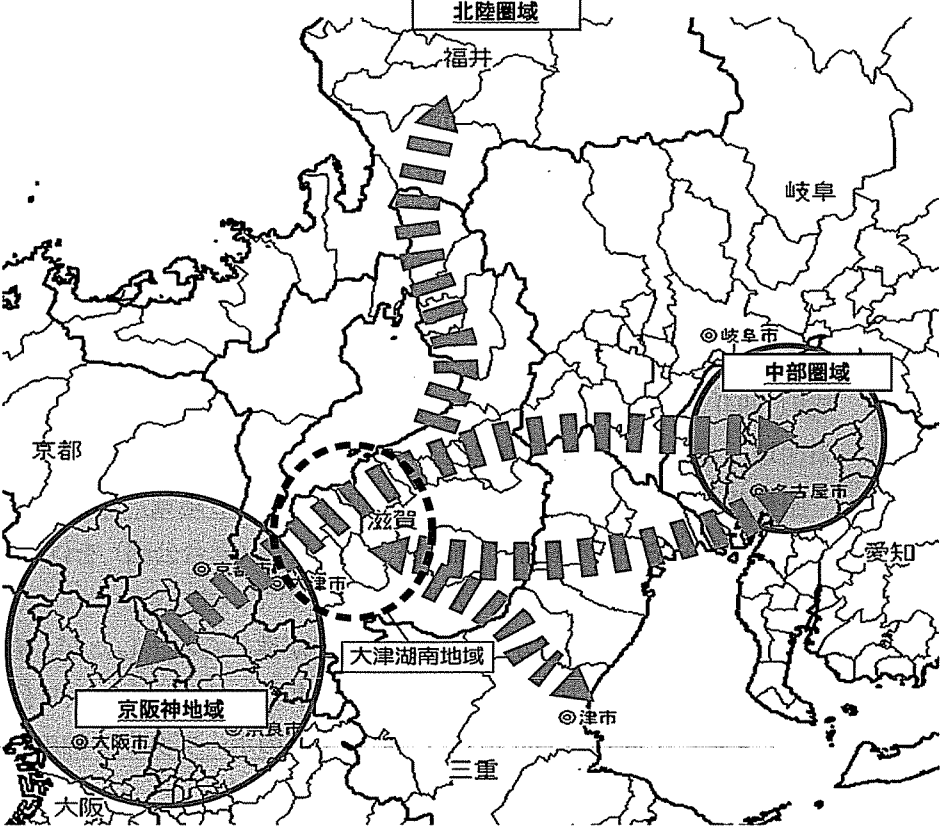
章・節	現行（平成 19 年 3 月策定）	改訂理由	改訂素案（平成 25 年 3 月：予定）
	表示凡例 改訂した箇所：_____ 削除した箇所：_____（見え消し）		表示凡例 改訂文：_____ 挿入文：_____
3. 都市の基盤状況	<p>(1) 土地利用状況</p> <p>野洲市の土地利用をみると、琵琶湖水面を除く市域の約4割が水田等の農地であり、山林、その他自然地を含めると約7割を自然系の土地利用で占めています。一方、JR野洲駅を中心として、JR東海道本線、JR東海道新幹線と並行するかたちで商業・業務地、住宅地、工業地等の市街地が広がります。</p> <p>市域の市街化は、昭和40年代から国鉄（現JR）野洲駅周辺に、新しい住宅地等の形成が始まり、主要な都市基盤の整備が急速に進んできました。特に野洲駅の北口開発事業街区の整備により、市域の中心核が形成されました。</p> <p>昭和45年に野洲駅の北東側に電車基地が作られ、京阪神都市圏との時間距離が短縮され、利便性が高まったことにより、計画的な住宅地の開発が行われました。この時期に日本IBM（昭和46（1971）年完成）に代表される工場等の進出が始まり、次第に市街地が拡大していきました。</p> <p>市街地の状況について、国勢調査のDID（人口集中地区）の変遷から整理すると、昭和55（1980）年時点の1.2km²から、平成2（1990）年に2.2km²に拡大しており、この時期に急速に市街地が拡大したことがうかがえます。その後もDID面積、人口、人口密度は増加を続けています。</p>	<p>●DID 関連の記述を最新データに基いて更新 ※人口密度はH17→H22で減少</p> <p>●土地利用関連データを更新</p> <p>グラフ・図 要改訂</p>	<p>(1) 土地利用状況</p> <p>野洲市の土地利用をみると、琵琶湖水面を除く市域の約43%が水田等の農地であり、山林、その他自然地を含めると約67%を自然系の土地利用で占めています。一方、JR野洲駅を中心として、JR東海道本線、JR東海道新幹線と並行するかたちで商業・業務地、住宅地、工業地等の市街地が広がります。</p> <p>市域の市街化は、昭和40年代から国鉄（現JR）野洲駅周辺に、新しい住宅地等の形成が始まり、主要な都市基盤の整備が急速に進んできました。特に野洲駅の北口開発事業街区の整備により、市域の中心核が形成されました。</p> <p>昭和45年に野洲駅の北東側に電車基地が作られ、京阪神都市圏との時間距離が短縮され、利便性が高まったことにより、計画的な住宅地の開発が行われました。この時期に日本IBM（昭和46（1971）年完成）に代表される工場等の進出が始まり、次第に市街地が拡大していきました。</p> <p>市街地の状況について、国勢調査のDID（人口集中地区）の変遷から整理すると、昭和55（1980）年時点の1.2km²から、平成2（1990）年に2.2km²に拡大しており、この時期に市街地が急速に拡大したことがうかがえます。その後もDID面積、人口は増加を続けています。</p>
			

章・節	現行（平成19年3月策定）	改訂理由	改訂素案（平成25年3月：予定）
	表示凡例 改訂した箇所：_____ 削除した箇所：_____（見え消し）		表示凡例 改訂文：_____ 挿入文：_____
	<p>(2) 交通</p> <p>野洲市には、国道8号、国道477号をはじめ、主要地方道大津能登川長浜線、一般県道近江八幡大津線（さざなみ街道）等の幹線道路が通っており、湖東・湖北地域と湖南・大津市方面とを結んでいます。この他、野洲中主線、守山中主線、野洲甲西線等の県道及び主要市道により市内の道路交通網を形成しています。しかし、県道、市道の一部は狭幅員、未整備の部分があり、特に生活に密着した道路の整備が求められます。また、市域が河川にはさまれているため、河川横断箇所において朝夕に渋滞が発生しており、特に国道8号バイパス等の整備が課題となります。</p> <p>平成11年道路交通センサスによる主要道路の交通量は、国道8号、主要地方道大津能登川長浜線、一般県道近江八幡大津線（さざなみ街道）等の4路線が1万台/12時間を超え、本市の自動車交通は国土連携軸に沿った方向が主流となっています。</p> <p>ほぼ全ての路線で休日の交通量は平日よりも少なくなっていますが、近江八幡大津線（さざなみ街道）だけは休日の方が多くなっています。この路線は湖岸を通っており、沿道に各種観光、レジャー施設が立地していることが関係しているものと考えられます。</p> <p>本市の鉄道は、JR東海道本線（琵琶湖線）のJR野洲駅及びJR篠原駅があり、この両駅を中心にして近江鉄道株式会社及び滋賀交通株式会社の路線バスが市内を網羅しています。JR琵琶湖線は、京阪神都市圏と周辺地域との連絡強化を進めており、本市と京都、大阪との時間距離は近年縮まってきています。特にJR野洲駅は新快速電車が停車するため、大阪への通勤圏に十分含まれるようになりました。</p> 	<p>● 図面改訂</p>	<p>(2) 交通</p> <p>野洲市には、国道8号、国道477号をはじめ、主要地方道大津能登川長浜線、一般県道近江八幡大津線（さざなみ街道）等の幹線道路が通っており、湖東・湖北地域と湖南・大津市方面とを結んでいます。この他、野洲中主線、守山中主線、野洲甲西線等の県道及び主要市道により市内の道路交通網を形成しています。しかし、県道、市道の一部は狭幅員、未整備の部分があり、特に生活に密着した道路の整備が求められます。また、市域が河川にはさまれているため、河川横断箇所において朝夕に渋滞が発生しており、特に国道8号バイパス等の整備が課題となります。</p> <p>平成22年道路交通センサスによる主要道路の交通量は、国道8号、主要地方道大津能登川長浜線、一般県道近江八幡大津線（さざなみ街道）等の4路線が1万台/12時間を超えています。また、本市の自動車交通は国土連携軸に沿った方向が主流となっています。</p> <p>ほぼ全ての路線で休日の交通量は平日よりも少なくなっていますが、近江八幡大津線（さざなみ街道）だけは休日の方が多くなっています。この路線は湖岸を通っており、沿道に各種観光、レジャー施設が立地していることが関係しているものと考えられます。</p> <p>本市の鉄道は、JR東海道本線（琵琶湖線）のJR野洲駅及びJR篠原駅があり、この両駅を中心にして近江鉄道株式会社及び滋賀交通株式会社の路線バスが市内を網羅しています。JR琵琶湖線は、京阪神都市圏と周辺地域との連絡強化を進めており、本市と京都、大阪との時間距離は近年縮まってきています。特にJR野洲駅は新快速電車が停車するため、大阪への通勤圏に十分含まれるようになりました。</p> 

章・節	現行（平成 19 年 3 月策定）	改訂理由	改訂素案（平成 25 年 3 月：予定）
	表示凡例 改訂した箇所：_____ 削除した箇所：_____（見え消し）		表示凡例 改訂文：_____ 挿入文：_____
4. 都市環境 と景観	<p>(1) 都市の環境</p> <p>野洲市は、<u>新市合併</u>により、琵琶湖から、これに注ぐ野洲川、そして希望が丘、三上山に至る、豊かな“水と緑”に囲まれた多様な自然環境を有する都市となりました。また、琵琶湖岸・湖面は琵琶湖国定公園、希望が丘・三上山周辺は三上・田上・信楽県立自然公園に指定されているとともに、ピワコマイアミランド、滋賀県希望が丘文化公園など、自然環境と身近にふれあえるレクリエーション施設が立地しています。</p> <p>都市計画公園は、14箇所（総合公園1、近隣公園4、街区公園9）、都市計画緑地が7箇所計画決定されています。総合公園（野洲公園）や野洲川緑地など、面積規模の大きな公園が計画されていますが供用面積は一部です。また、地域住民に身近な公園については、街区公園や児童遊園等は配置されているものの、地区公園、近隣公園等の地域の中心となる公園は少ない状況です。</p> <p>本市の下水道普及率は99.6%に達しており、未整備は市街化区域の一部を残すだけとなっております。特定環境保全公共下水道事業や農業集落排水事業を実施した集落地では、下水道整備が完了しています。また、JR野洲駅周辺の市街地の一部では、大雨時に道路が冠水する地区があるため、適切な雨水排水対策が必要となっております。</p> <p>既成市街地のほぼ中央を流れる祇王井川は、「平家物語」に登場する祇王にゆかりのある歴史的資源であるとともに、近年ではポケットパーク等の整備により周辺の都市環境に潤いを与える貴重な資源となっております。</p> 	<p>●市内の大半の河川が合流する家棟川に改訂</p> <p>●下水道普及率データを H23 統計書より更新</p> <p>●図面改訂</p>	<p>(1) 都市の環境</p> <p>野洲市は、<u>2町合併</u>により、琵琶湖から、これに注ぐ家棟川、そして希望が丘、三上山に至る、豊かな“水と緑”に囲まれた多様な自然環境を有する都市となりました。また、琵琶湖岸・湖面は琵琶湖国定公園に、希望が丘・三上山周辺は三上・田上・信楽県立自然公園に指定されており、ピワコマイアミランド、滋賀県希望が丘文化公園など、自然環境と身近にふれあえるレクリエーション施設等に恵まれています。</p> <p>都市計画公園は、14箇所（総合公園1、近隣公園4、街区公園9）、都市計画緑地が7箇所計画決定されています。総合公園（野洲公園）や野洲川緑地など、面積規模の大きな公園が計画されていますが供用面積は一部です。また、地域住民に身近な公園については、街区公園や児童遊園等は配置されているものの、地区公園、近隣公園等の地域の中心となる公園は少ない状況です。</p> <p>本市の下水道普及率は99.3%に達しており、未整備は市街化区域の一部を残すだけとなっております。特定環境保全公共下水道事業や農業集落排水事業を実施した集落地では、下水道整備が完了しています。また、JR野洲駅周辺の市街地の一部では、大雨時に道路が冠水する地区があるため、適切な雨水排水対策が必要となっております。</p> <p>既成市街地のほぼ中央を流れる祇王井川は、「平家物語」に登場する祇王にゆかりのある歴史的資源であるとともに、近年ではポケットパーク等の整備により周辺の都市環境に潤いを与える貴重な資源となっております。</p> 

章・節	現行（平成 19 年 3 月策定）	改訂理由	改訂素案（平成 25 年 3 月：予定）
	表示凡例 改訂した箇所：_____ 削除した箇所：_____（見え消し）		表示凡例 改訂文：_____ 挿入文：_____
	<p>（2）都市の景観</p> <p>野洲市域の南部に位置する三上山は、富士山に似た円錐型の山容から通称「近江富士」と呼ばれ、古くから湖南平野を歩く旅人や湖上を進む舟人の目印として、近江を代表する秀麗な眺望景観を形成しています。日本を代表する名勝・景勝として選定された近江八景のうち“瀬田の夕照”では、瀬田唐橋から遠景に三上山を望んでいます。また、国指定の名勝である琵琶湖対岸の居初氏庭園（天然図画亭庭園 大津市堅田町）は、三上山を借景に取り込んだ庭園です。このように、三上山は、わが国を代表する琵琶湖周辺の景観資源として、市域のみならず、滋賀県下の風景に重要な役割を担っています。そして、三上山から妙光寺山、鏡山等に連なる山地、丘陵地は、風致地区に指定されており、湖南平野や琵琶湖岸から眺望される美しい山並みの保全が図られています。この三上山を含め、旧野洲町において野洲八景が選定されています。野洲八景は、『三上山の秀麗』、『野洲川の清流』、『希望が丘の新緑』、『御池の静寂』、『野洲平野の眺望』、『弥生の森の秋色』、『向山の暮色』、『悠紀の里の薫風』が選定されています。</p> <p>琵琶湖では、湖岸の風景、水面の風景、そして遠景にある山並みの三つが大切な風景の要素となっています。市域では、マイアミ浜、あやめ浜等の白砂青松の砂浜や、ここから沖島と雄大な比良山系を背景とする眺望が琵琶湖を取り巻く風景の構成要素となります。市域北部の琵琶湖岸と湖面は、「ふるさと滋賀の風景を守り育てる条例（風景条例）」に基づく琵琶湖景観形成地域に指定されています。また、「ふるさと滋賀の風景を守り育てる条例（風景条例）」では、主要地方道大津能登川長浜線等の沿道を「沿道景観形成地区」に指定しています。</p>	<p>●「野洲市景観形成方針」に即し、「野洲市景観計画」に整合させる</p>	<p>（2）都市の景観</p> <p>野洲市域の南部に位置する三上山は、富士山に似た円錐型の山容から通称「近江富士」と呼ばれ、古くから湖南平野を歩く旅人や湖上を進む舟人の目印として、近江を代表する秀麗な眺望景観を形成しています。日本を代表する名勝・景勝として選定された近江八景のうち“瀬田の夕照”では、瀬田唐橋から遠景に三上山を望んでいます。また、国指定の名勝である琵琶湖対岸の居初氏庭園（天然図画亭庭園 大津市堅田町）は、三上山を借景に取り込んだ庭園です。このように、三上山は、わが国を代表する琵琶湖周辺の景観資源として、市域のみならず、滋賀県下の景観に重要な役割を担っています。そして、三上山から妙光寺山、鏡山等に連なる山地、丘陵地は、風致地区に指定されており、湖南平野や琵琶湖岸から眺望される美しい山並みの保全が図られています。この三上山を含め、旧野洲町において野洲八景が選定されています。野洲八景は、『三上山の秀麗』、『野洲川の清流』、『希望が丘の新緑』、『御池の静寂』、『野洲平野の眺望』、『弥生の森の秋色』、『向山の暮色』、『悠紀の里の薫風』が選定されています。</p> <p>琵琶湖では、湖岸の景観、水面の景観、そして遠景にある山並みの三つが大切な景観の要素となっています。市域では、マイアミ浜、あやめ浜等の白砂青松の砂浜や、ここから沖島と雄大な比良山系を背景とする眺望が琵琶湖を取り巻く景観の構成要素となります。市域北部の琵琶湖岸と湖面は、「野洲市景観計画」に基づく琵琶湖景観形成地区及び琵琶湖景観形成特別地区に指定しています。また、「野洲市景観計画」では、主要地方道大津能登川長浜線等の沿道を「沿道景観形成地区」に、JR野洲駅南口周辺については、「野洲駅南地区」に指定しています。</p>
5. 都市の歴史と文化	<p>野洲市域は、小堤遺跡等の存在により旧石器時代から人が暮らしていたことが確認されます。大岩山において弥生時代の銅鐸が数多く出土しており、中には日本最大のものがあるなど、野洲市が“銅鐸のまち”である貴重な歴史遺産です。古墳時代には大岩山古墳群、越前塚古墳を始めとする多くの古墳が築かれ、「古事記」や「日本書紀」における「安直（やすのあたい）」、「安国造（やすのくにのみやつこ）」の記述と併せ、この地域に有力な豪族がいたことが伺えます。</p> <p>市域には御上神社、兵主神社、錦織寺など古い歴史を持つ神社・寺院が多くあり、建造物、絵画、彫刻、工芸品、書跡等国宝をはじめとする文化財が数多く残されています。また、境内にはまとまりのある緑地が存在し、市街地・集落地における地域環境・景観上重要な役割を担っています。特に、兵主神社には国の名勝に指定されている庭園があり、秋には紅葉が美しく、近年では庭園をライトアップして歴史的な空間を特徴づけています。</p> <p>旧中山道や旧朝鮮人街道沿いは、近世以来のまち並みの面影を残している箇所もあり、野洲川から行畑・小篠原・三ツ坂・桜生・辻町にかけての沿道は、昔ながらの風情が残っています。そして、点在する道標や祠、碑なども観光資源となっています。</p> <p>旧朝鮮人街道に近い永原の地は中世に勢力をもっていた永原氏の居城があり、その後、織</p>		<p>野洲市域は、小堤遺跡等の存在により旧石器時代から人が暮らしていたことが確認されます。大岩山において弥生時代の銅鐸が数多く出土しており、中には日本最大のものがあるなど、野洲市が“銅鐸のまち”である貴重な歴史遺産です。古墳時代には大岩山古墳群、越前塚古墳を始めとする多くの古墳が築かれ、「古事記」や「日本書紀」における「安直（やすのあたい）」、「安国造（やすのくにのみやつこ）」の記述と併せ、この地域に有力な豪族がいたことが伺えます。</p> <p>市域には御上神社、兵主神社、錦織寺など古い歴史を持つ神社・寺院が多くあり、建造物、絵画、彫刻、工芸品、書跡等国宝をはじめとする文化財が数多く残されています。また、境内にはまとまりのある緑地が存在し、市街地・集落地における地域環境・景観上重要な役割を担っています。特に、兵主神社には国の名勝に指定されている庭園があり、秋には紅葉が美しく、近年では庭園をライトアップして歴史的な空間を特徴づけています。</p> <p>旧中山道や旧朝鮮人街道沿いは、近世以来のまち並みの面影を残している箇所もあり、野洲川から行畑・小篠原・三ツ坂・桜生・辻町にかけての沿道は、昔ながらの風情が残っています。そして、点在する道標や祠、碑なども観光資源となっています。</p> <p>旧朝鮮人街道に近い永原の地は中世に勢力をもっていた永原氏の居城があり、その後、織</p>

章・節	現行（平成 19 年 3 月策定）	改訂理由	改訂素案（平成 25 年 3 月：予定）
	表示凡例 改訂した箇所：_____ 削除した箇所：_____（見え消し）		表示凡例 改訂文：_____ 挿入文：_____
	<p>田信長が近江進攻の際、家臣の佐久間信盛を配置し、自らも宿泊したことが記録されています。そして、徳川氏の時代に入ると、その北側に御茶屋御殿（永原御殿）が築かれ、徳川三代にわたり、上落下向する際の宿泊・休息の場として利用されていました。なお、御殿の建物は芦浦観音寺に移築され、<u>現在も残されています。</u></p> <p>江戸時代の国文学者で松尾芭蕉の師匠として知られている北村季吟は、野洲市北の集落で生まれました。毎年、命日の6月15日（現在は第2土曜日）には、北村季吟顕彰俳句会が北村季吟句碑前で行われています。</p>		<p>田信長が近江進攻の際、家臣の佐久間信盛を配置し、自らも宿泊したことが記録されています。そして、徳川氏の時代に入ると、その北側に御茶屋御殿（永原御殿）が築かれ、徳川三代にわたり、上落下向する際の宿泊・休息の場として利用されていました。なお、御殿の建物は芦浦観音寺に移築されたといわれています。</p> <p>江戸時代の国文学者で松尾芭蕉の師匠として知られている北村季吟は、野洲市北の集落で生まれました。毎年、命日の6月15日（現在は第2土曜日）には、北村季吟顕彰俳句会が北村季吟句碑前で行われています。</p>
6. 都市計画の経緯	<p>旧野洲町では昭和35(1960)年7月4日に、旧中主町では昭和36(1961)年6月6日に、全域（琵琶湖水面を除く）が旧都市計画法による都市計画区域に指定されました。また、都市計画道路出庭大篠原線、野洲川日野川線、野洲南桜線、小篠原三宅線、野洲停車場線、野洲中央線、<u>市三宅北桜線、南桜永原線</u>といった現在の主要な都市計画道路はこの時期に当初決定された路線です。</p> <p>昭和43(1968)年の新たな都市計画法の制定を受けて、昭和45(1970)年4月22日、大津湖南都市計画区域が決定し、現在の市域全域（琵琶湖面積を除く<u>6,145ha</u>）が含まれることとなりました。昭和45(1970)年7月15日に市街化区域と市街化調整区域の区域区分が決定し、旧野洲町、旧中主町合わせて594haが市街化区域となりました。この後、昭和52(1977)年12月23日、昭和59(1984)年12月28日、平成6(1994)年10月21日、平成14(2002)年4月30日と、<u>4回の変更が行われ、平成17年3月現在で野洲市の市街化区域は749.7ha</u>となっています。特に平成6(1994)年の第3回変更では、大篠原地区の工業地（株式会社村田製作所）や乙窪地区工業団地、ホープタウン錦の里により大規模な拡大が行われています。</p> <p><u>昭和47(1972)年6月20日には新たに用途地域（8地域）が指定され、さらに風致地区（三上風致地区）や、主な都市計画道路、野洲公園（総合公園）をはじめとする公園・緑地など、本市の基本となる都市計画の大半が決定されています。</u></p> <p>市域では、昭和40年代から住宅地の開発が進められましたが、昭和53(1978)年には旧中主町吉地西河原地区において、土地区画整理事業の計画決定により住宅地の形成が進められました。また、<u>平成10(1998)年には、旧中主町のホープタウン錦の里において、地区計画制度を活用した良好な住宅地の形成が行われています。</u></p>	<p>●時点修正</p> <p>●時点修正</p> <p>●現行法による用途地域区分との整合を図るため</p> <p>●「地区計画」活用地区の増加を反映</p>	<p>旧野洲町では昭和35(1960)年7月4日に、旧中主町では昭和36(1961)年6月6日に、全域（琵琶湖水面を除く）が旧都市計画法による都市計画区域に指定されました。また、都市計画道路出庭大篠原線、野洲川日野川線、野洲南桜線、小篠原三宅線、野洲停車場線、野洲中央線、<u>市三宅妙光寺線、南桜永原線</u>といった現在の主要な都市計画道路はこの時期に当初決定された路線です。</p> <p>昭和43(1968)年の新たな都市計画法の制定を受けて、昭和45(1970)年4月22日、大津湖南都市計画区域が決定し、現在の市域全域（琵琶湖面積を除く<u>6,053ha</u>）が含まれることとなりました。昭和45(1970)年7月15日に市街化区域と市街化調整区域の区域区分が決定し、旧野洲町、旧中主町合わせて594haが市街化区域となりました。この後、昭和52(1977)年12月23日、昭和59(1984)年12月28日、平成6(1994)年10月21日、平成14(2002)年4月30日と、<u>平成24年3月28日と、5回の変更が行われ、野洲市の市街化区域は767.2ha</u>となっています。特に平成6(1994)年の第3回変更では、大篠原地区の工業地（株式会社村田製作所）や乙窪地区工業団地、ホープタウン錦の里により大規模な拡大が行われています。</p> <p><u>市街化区域には、平成24年3月現在で11種の用途地域が指定され、さらに風致地区（三上風致地区）や、主な都市計画道路、野洲公園（総合公園）をはじめとする公園・緑地など、本市の基本となる都市計画の大半が決定されています。</u></p> <p>市域では、昭和40年代から住宅地の開発が進められましたが、昭和53(1978)年には旧中主町吉地西河原地区において、土地区画整理事業の計画決定により住宅地の形成が進められました。また、<u>近年では住宅地、JR野洲駅周辺の中心商業地、再開発地区等において、地区計画制度を活用し、各地区の特性に応じて良好な市街地等の環境を誘導するきめ細かなまちづくりが行われています。</u></p>

章・節	現行（平成19年3月策定）	改訂理由	改訂素案（平成25年3月：予定）
	表示凡例 改訂した箇所：_____ 削除した箇所：_____（見え消し）		表示凡例 改訂文：_____ 挿入文：_____
7. 都市の広域的な位置づけ	<p>野洲市は、旧東海道に近接し、旧中山道沿いに位置していたことから、古くから交通の要衝であり、現在においても、名神高速道路（中央自動車道西宮線）、国道8号、JR東海道本線、JR東海道新幹線が横断する西日本国土軸（第一国土軸）に位置しています。また、近畿圏においては、<u>多核格子構造を形成する戦略的な連携軸上にあり、特に「福井・滋賀・三重連携軸」に位置づけられています。</u></p> <p>「福井・滋賀・三重連携軸」は、古くから交通の要衝であった、福井平野から琵琶湖周辺を経て伊勢湾（太平洋）に至る地域について、これらの交通利便性、産業集積、自然環境等をいかし、都市機能、産業機能、学術研究機能等の諸機能を充実するとともに、その連携を強化することによって、福井から滋賀、三重連携軸を形成するものです。</p> <p>本市を含む<u>大津湖南地域は、将来的にも鉄道網、広域幹線道路網の充実等により、京阪神大都市地域はもとより、名古屋大都市地域、北陸地域との連携強化が期待されます。</u>さらに福井、滋賀、三重、岐阜県による「<u>日本まんなか共和国</u>」の設立により、<u>県間交流を促進する事業が進められており、県をまたぐ連携がますます重要となっています。</u></p>  <p style="text-align: center;">【野洲市を中心とする連携軸のイメージ】</p>	<p>●「全国総合開発計画」から「国土形成計画」へ、「近畿圏整備基本計画」から「近畿圏広域地方計画」への更新に整合させる</p>	<p>野洲市は、旧東海道に近接し、旧中山道沿いに位置していたことから、古くから交通の要衝であり、現在においても、名神高速道路（中央自動車道西宮線）、国道8号、JR東海道本線、JR東海道新幹線が横断する<u>国土軸上に位置しています。</u>また、近畿圏においては、<u>京阪神都市圏近郊の大都市周辺地域に位置づけられています。</u></p> <p>本市を含む<u>滋賀県は、近畿圏において戦略的な位置にあり、将来的にも広域幹線道路網の充実等により、京阪神地域はもとより、中部圏域、北陸圏域との連携強化が期待されます。</u></p> <p><u>琵琶湖に関しては、水と緑の広域ネットワークプロジェクトとして、大阪湾や淀川流域とともに水環境の再生、水と緑のつながりの構築、人と自然との触れ合いの確保、水文化の継承等の主要プロジェクトが位置づけられています。</u></p>  <p style="text-align: center;">【野洲市を中心とする連携軸のイメージ】</p>